

これからの外国語教育と JACTFL の役割

當作 靖彦

當作靖彦です。しばらくお付き合いをお願いします。今、吉田先生から英語教育についてのお話がありましたが、私は主に英語以外の外国語教育の話をしたと思います。

私は、今アメリカの大学で外国語のプログラムディレクターをしています。仕事の一つに、外国語のクラスの予算折衝があります。私の大学の場合、予算執行の副学長がいて、その人と毎年交渉をします。彼らは、主に科学系の先生で、博士課程の論文を書くときに外国語の履修が必要なので、外国語の勉強はしているわけですが、彼らから必ず言われるのが、「外国語のクラスはつまらない」「苦痛である」「あんな無駄なものはない」「やったのは文法の規則と単語の丸暗記で、クラスに来る前にテキストのダイアログを暗記して、何度も何度も復唱して、憶えて、先生の前やクラスのみんなの前でそれを間違わずに言う。あんなにつまらないクラスはなかった。あんなに苦痛なクラスはなかった」ということを必ず言うんですね。「あれだけ外国語の勉強に時間を費やしたにも関わらず、全然使い物にならなかった。」「学習したことが現実生活で役に立たない。」「外国語はツールであって内容がない。だから大学で教える価値がない」と言うのです。ここには高校の先生もいらっしゃるので、申し上げづらいのですが、「外国語は大学で教える価値はない。あんなものは高校までで勉強して来ればいいじゃないか。」ということを真顔で言うアドミニストレーターがたくさんいます。アメリカは今経済が大変ですから大学の予算も厳しく、クラスをカットしなければならない。最初にクラスのカットの対象になるのは外国語なんです。「外国語なんて、大学がお金をかけてやる必要はない。」と皆さんおっしゃる。そこで一体どんな内容の授業だったのか聞いてみると、「短期間で多くの内容をカバーする」授業だったそうです。例えば全過去とか半過去とか、複合過去とか、ここまで聞くとフランス語をやっていたんだとわかります。何で過去が5つあって、現在が2つで未来が2つとか、いろいろなことを言う。それから直説法だけじゃなくて、条件法があったり接続法があったり、それをなぜ1年でやらなければならないのか？あんなもの1年で絶対頭に入るはずがない。短期間で多くのものをカバーするためには丸暗記とか、役に立たない連続ドリルをやらなくてはならない。先生の無味乾燥な文法の説明を聞いてもつまらない。これはアメリカの話で日本の話ではないですよ。教師中心で、教師が前に立って、教師がひとりでもや

る。ナルシストの外国人の先生が多いようで、一人でフランス語をペラペラしゃべって、それで満足している。学生は受身で自律的に考える必要がない。とにかく言われたことを丸暗記すればいい。外国語では言語・文化への深い洞察力は身につかない。だから外国語教育にお金をかけるのは無駄でもったいない。数学とか科学のクラスの実験器具を買ったほうが大学教育にとっては意味がある、と本当に言われるんですね。これは、外国語の教師として、本当につらいです。

本当に外国語教育は無駄なのでしょうか？ここには外国語の先生がたくさんいますから、無駄ではないとはっきりと言えそうですが、なぜ、外国語教育は無駄ではないのか？そこで、外国語学習のメリットについて考えてみたいと思います。1960年代以降様々な研究がおこなわれており、最近では脳をスキャンして何かをしている時に脳のどこを使っているかがわかる脳科学も発達してきました。外国語を知っている、バイリンガルである、マルチリンガルである、プルリンガルであるということがどういう意義があるのか？どういう影響を人間に与えるのかという研究が進んできています。例えば認知的なことでは、外国語を知っている人、バイリンガルな人は認知能力がより発達していて、外国語を知らない人よりも認知能力が高いということが実験ではっきりわかります。それから暗記力が優れている。これはいいことか悪いことか分からないのですが、外国語クラスは記憶が勝負ですから外国語を勉強することによって記憶力が非常に高まるという研究結果がでてきます。

それから外国語を勉強した人はクリエイティビティ＝創造性が高いということがわかっています。さらに認知的には優れた問題解決能力を持っている。現代社会は問題が非常に複雑になっていますから、優れた問題解決能力を持つことは非常に大切なことです。さらに考えに柔軟性があり、多様な考え方をもっているいろいろなアプローチに対応できるということがわかってきました。加えて、情報処理能力が高いことがわかっていますし、外国語を勉強している人は脳の老化が遅く、普通 4 年から 6 年遅く、マルチリンガルとかプルリンガルの人は、認知症にかかりにくいということも研究の結果からわかっています。

アカデミックな点で考えてみると、知能程度が高くなるということが 60 年代からいわれています。外国語を学ぶことによって母国語の能力(読解、作文)が高まる。それから数学の能力や科学の仮説能力も上がり、結果として、標準テストの点数が高くなるということもわかりました。また、アメリカの大学の例ですが、外国語を長く勉強していると、大学の成績が良くなるということがわかっています。だから我々は、保護者に「外国語を学ぶと母語や数学の力が伸びますよ」と言うときに、これらの研究結果を用い

ます。

日本の幼稚園や小学校で様々な外国語を教えるところは少ないと思いますが、アメリカでは幼稚園から複数の外国語を教えているところが多くあります。幼年時から外国語に触れることは様々な価値があるという研究も進んでいます。発音が良くなるのは当然ですが、数学能力や、読解能力、作文能力も高くなる。それに脳の灰白皮質の密度が高くなり、いわゆる知能程度が高くなるという実験結果が出ています。また、様々な外国語を勉強していると有名大学に入りやすくなる。そしていい仕事につきやすくなる。人格的には自分に対して自信を持つことができる。さきほど吉田先生から日本の若者は自信がないという話が出ましたが、幼児期から外国語を勉強していたら、自分に対し、より自信を持つことができることが研究でわかってきている。さらに、非常に広い視野を持ち、異文化理解ができ、社会生活に必要なコミュニケーション能力が備わり、高度な思考能力を育成することができます。

いわゆる暗記を強いる教え方ですと、おそらく高度の思考能力はつかないかもしれませんが、きちんとした外国語教育を行う中で、創造することや分析することを外国語のクラスに盛んに持ち込むことによって高度の思考能力を身につけることができる。それから21世紀は変化が非常に速い。その新しい変化に即対応できる柔軟力が身につく。異なる考えを持つ人に寛容になれるような心の広い人をつくる。人間育成を助ける。というようなことが研究でわかっています。つまり、外国語を勉強することは十分メリットがあるということ、我々は自信を持って言うことができます。

さきほどの私の副学長の話で必ず言われるのは、いわゆる「現実社会に対応していない」ということでした。クラスで学んだことが社会で通用しないということで、クラスでやっていることと現実社会にギャップがあるということをいつも言われるわけです。それで、いわゆる文法の丸覚えとか、つまらないドリルをやっているようでは、絶対に現実社会に対応できないわけで、我々外国語教師もそういう問題を克服するために努力をしています。有名な教育学者の John Dewey は、学校とは現代の生活を具現化したものでなければならないと言っています。したがって教育とは、未来の生活のための準備ではなく、今を生きるためのプロセスである。我々は将来学校を卒業したときに学生が対応できるようにとよく言いますが、John Dewey はクラスからすぐそとに出たときに対応できる、そういう学生を育てる場でなくてはならないと言います。我々日本の中にもグローバル社会はすでにあります。自分のクラスから一歩外に出たときに、そこにあるグローバル社会に対応できる学生を作るように努力しなければなりません。私も人生長く生きていますが、私が最初に英語を勉強したときはまさにオーディオリンガル

アプローチでした。そのときは文法と語彙の学習だったわけですが、そのうちコミュニケーションティブアプローチというのが出てきて、情報伝達、情報確保、さらに最近は言語を使って社会活動能力開発、実際にクラスの外に出て外国語を使って現実の社会で社会活動ができる、そういうような外国語教育をするように変わってきました。オーディオリンガルのときには、どの文法を教えよう、どんな単語を教えよう、という教育内容、コンテンツに時間をかけました。それがコミュニケーションティブアプローチになってコンテンツの文脈における情報獲得、伝達をどういうふうにさせるかということを考えなければならなくなりました。今の新しい外国語教育のアプローチというのは学習コミュニティの中で、外国語を使ってつながりを持つ、コミュニティを作る。そういうような動きに変わってきています。ですから、オーディオリンガルアプローチのときには言語学習という何かを憶えるものでした。それが習ったことを実際にスキルとして使えるということに興味に移り、今は、実際に外国語を使ってコミュニティに参加するという社会参加に対して興味を持つようになりました。

先生が一人でやって「みなさんどう思いますか？」という授業ではなく、学習者主体で、学習者自身が自分でいろんなことを決める。そういうような動きがどんどんできていて、外国語学習と現実社会との乖離がだんだんなくなってきています。外国語教育が現実社会で役に立たないということを言われたときに、我々はそれを論破できるようなアプローチに変わってきています。

今、我々外国語教師として外国語教育を行う上で、一番考えなければならないことは、「なぜ？」です。「なぜ我々は外国語を教えているのか？」「なぜ自分たちの学生は外国語を勉強しているのか？」日本の一般社会は、一歩外に出たらすぐ英語が使える状況では、まだない。ましてや、ドイツ語やフランス語やロシア語やスペイン語、韓国語、中国語なんて使える社会ではない。そういう状況で「なぜ、中国語を勉強するのか」「なぜ韓国語を勉強するのか」「なぜロシア語を教えなければならないのか？勉強しなければならないのか」その「なぜ？」を考えるということが、非常に大切になってきています。皆さん、自分で、なぜ外国語を教えているのか、自分たちの前にいる学生たちがなぜロシア語を勉強しているのか、考えたことがありますか？ま、はっきり言いますと、私、給料をもらうために教えなければなりません、それは「なぜ？」ではないと思うんですね。その「なぜ？」を考えるときに、我々に示唆を与えてくれる本があります。その本には「21世紀の言語教育の理念」として「人間形成のための総合的能力開発」と書いてあります。つまり外国語を教えることによって人を作る。人間を作る。人間の能力を開発する。そして、21世紀の外国語教育の目標として、「自己の発展、

他者の発展、つながりの実現」という言葉が書かれています。つまり、外国語を勉強するという事は、例えば中国語を勉強するという事は、中国語を話す人全体、あるいは前にいる中国語話者、そのことを発見する、知る、そのことによって逆に自分のことをよく知る、発見することができる。そうすると他人がわかって、自分がわかって、つながりができる。それが言語教育の目的である。そのために我々は外国語を教えているのである。ということが書いてある本があるんですね。この本は、国際文化フォーラムが出版した『外国語学習のめやす 2012(以下、「めやす」)』という本で、私も作成に参加しました。

この本は、副題が「高等学校中国語、韓国語教育からの提言」となっています。文部科学省からの委嘱事業として始まったものですが、高校、大学そしてここにも何人かいらっしゃいますが、中国語、韓国語教育者が作成したものです。中国語、韓国語となっていますが、全ての外国語の教員、おそらく国語教育にも利用できると思います。それからこの理念は、高校・大学だけではなくて、幼稚園や小学校、全てのレベルの外国語教育に適応できます。21世紀の日本における外国語教育、あるいは教育全体の方向性を提示した非常に大切なドキュメンテーションだと私は思っています。この「めやす」は、これからの日本の外国語教育のクラス運営がどういうものであるべきかという姿を示していますし、これからの言語教育政策立案の指針を示す重要なものであるとも言えます。外国語教育はすばらしい、外国語教育は役に立つ、日本の外国語教育はさらに活性化されなければならないというアドボカシーについても書かれています。

「めやす」は、高校・大学の中国・韓国語の教育目標を **can-do statement** で示しています。CEFR やアメリカのナショナルスタンダード、オーストラリアのベンチマークといったスタンダードにもとづいた教育の流れをくんだものですが、高い目標を掲げてそれを達成するように学習すれば、学習効果が上がり外国語のクラスが良いものになるというものです。**can-do statement** は、4つのレベルに分けられ、それぞれ何を達成しなければならないかが書かれています。そして、それをどのように評価すべきか、ということも書いてあります。つまり、学習者への説明責任、ロシア語、中国語、韓国語を勉強するのであれば、しっかりと責任を持って、その目標を達成するような勉強をしましょう。また、教師も生徒が目標を達成できるよう教育をしましょう、という「教育責任」を示したものではないかと思うのです。

「めやす」では、外国語教育の目標領域として「3×3+3」という、12の領域を示しました。3×3 は、外国語教育が行うべき領域で、「言語領域」「文化領域」「グロー

「バル社会領域」を横のラインで表示したものです。これに能力の目標として、「わかる」「できる」「つながる」の3領域を縦に表示しました。我々は外国語を教えているわけですから、言語を教えるのは当然で、言語領域があるのは当然ですが、言語を教えるにあたっては文化も教えなければならない。そして言語を使うということは、社会の中でコミュニティを作るとか、つながりを作るとか、そういう社会活動でもあるわけです。ですから、外国語のクラスでも社会活動能力を身につけるということが非常に大切であり、この「グローバル社会領域」が必要になります。今、企業の人たちに「21世紀の会社員、ビジネスマンにとって一番大切な能力は何ですか？」と聞くと、どの社長さんも必ず言うのは「協働能力」です。この「めやす」の中でも、「グローバル社会領域」の目標として、協働力、高度の思考能力、それから情報活用能力を身につけることをあげています。

おそらく、今までの「わかる」ということは、オーディオリンガルアプローチの時代には学習目標が文法がわかるということだったと思います。そしてコミュニケーションアプローチの時代に「できる」という、実際にスキルを使ってコミュニケーションしましょう、という目標が入り、さらに、この「めやす」では、これらに加えて「つながり」というコミュニケーション、情報を得ることによって他人とつながる、あるいは情報を与えることによって他人とつながるという「つながる能力」を身につけることが、新たな目標として入ってきています。「3×3+3」には、学生の学習スタイルや関心事だけではなく、既習内容や経験、さらに他の教科内容まで入っています。今までオーディオリンガルアプローチでは言語教育の「わかる」というものだけを目標にしていた。それがコミュニケーションアプローチでは、言語領域と文化領域の「わかる」「できる」が目標だった。そしてこの「めやす」ではさらに外国語学習の目標を広げて、最終的にはグローバル社会に貢献できる、これからの新しい社会、新しい世界を作っていくことができる人間を作ることが言語教育の目標であると、はっきり示しています。繰り返しになりますが、外国語学習の目標の変遷として、我々が英語を学習したときは、文法を覚えるとか、単語を覚えるとか、その「Know」が目標でした。私がアメリカに行っておこなった外国語教育の目標は、その「Know」を使って何かをする、コミュニケーションするという「Do」になった。新しい外国語教育はさらに「Be」、人間を作る、これからの日本をしょって立てる、グローバル社会で生きることができる、そういうような学生を作るのが目標に変わってきたと思います。これらを実践することによって我々は外国語教育の価値を外に提示することができる。私は、言語教育の目的とは、言語の持つ力を教えることだと思います。その言語の力を正しく使うことによって、新しい知識を得て、人とつながり、人の心を変え、

社会を変える。さらには時代を作ったり、歴史を作ったりする。そういうようなことをする力を、言葉は持っていると思うんですね。そういう力を教えるのが、我々言語の教師の役割であると思うのですが、果たして、そういう風に我々は言語を教えているか？

我々の日本に話を戻すと、言語の力を教えることを阻む大きな壁が日本にはある。それは何かというと「入学試験の壁」です。21世紀の教育アプローチが必要だというときに、いろいろな大学の入学試験は、20世紀どころではない、19世紀に作られたテストのモデルを使って、いまだに試験をやっている。それで実際に入学試験でやっていることは、現実社会で役に立たないというか、現実社会で全然使われることのないことで、偏差値で、標準テストで、点数で個人を評価する。あるいは大学の格付けをするという、私はこれは教育ではないと思うんです。おそらくここにいらっしゃる先生たちも、本当の教育を自分のクラスでやりたいと思っているのだけれど、ゴールとして入学試験があるためそれができない。入学試験を目標にしないと親や校長先生にしかられる。自分の高校のランクが下がる。そういう教育とは言えない教育のシステムというのが、今、日本で行われているわけです。日本で真の学習がなされるためには、今の教育が減ばないといけない。はっきり言って、大学入試がなくなるとか、吉田先生がおっしゃったように大学入試が良いものになるとかしない限り、日本の教室で絶対に真の学習は起きないと思います。教育の改革が必要なんです。

私は、日本のひどい英語教育を受けてアメリカに行って、35年アメリカに住んだ今でも英語でみじめな思いをしています。でも、日本の教育に希望が無いかと言うと、そうではない。まだまだ、日本の教育にも希望がある。それは何かというと、ここにいる外国語教師の皆さんです。この「めやす」が、中国語、韓国語で作られたのは、それなりに意味が思うんです。文科省が中国語、韓国語で作りなさいと委嘱をしたのは、それなりに理由があって、おそらく先見の明が文科省にはあったのでしょう。中国語、韓国語は入学試験の元凶・壁が少ない。だから英語教育ではいろいろなアイデアが出てくるけど、入試のシステムの中に英語がガチガチに入っていて、あれだけ巨大な受験産業があれば受験のシステムを変えるのは難しい。しかし、その影響を受けていない中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語といった外国語であればそれが可能だ。英語以外の外国語教育しか持ち得ないポテンシャルを持っている。それぞれの言語の先生というのは、ロシア語の学会にしても、スペイン語の学会にしても、言語の垣根を越えて一緒になれば大きい力になって教育を変える力さえ持っていると思うのです。だから言語によるコミュニケーションは人間の経験の中心にあることを認識して、言語能力開発を通して、将来日本のグローバル社会

を担うこどもに、言語、文化、社会行動能力を付与する外国語教育の機会をもっと日本のこどもに与えましょう。そういうことでできあがったのが JACTFL だと思っんです。JACTFL の活動を通して、より価値のある外国語教育を盛んにしよう。英語は変えられないかもしれないけど、外国語教育は日本の教育を変えるポテンシャルを持っている。外国語教育を通してグローバル社会に貢献できる人材を作ることだってできる。日本の教育の問題点として、いろんな学生がいるのに一つの方法で全部教えようとする。だから、英語だけではなくて、フランス語も勉強できる、ドイツ語だって勉強できる、ロシア語だって勉強できる、中国語だって勉強できる、韓国語だって勉強できる、そういう機会を日本で作り出すことによって、今英語で苦勞している学生がスペイン語のクラスに来て生き生きして能力が伸ばせる、そういうことだって絶対あり得ると思っんです。

JACTFL の役割は、単に外国語の先生たちが集まって楽しい時間を持つとか、情報を交換するとか、研究発表をするとかというのではなくて、社会や教育を変えていく力になろうとすることだと思います。JACTFL は、まだまだ出来たばかりですから難しいかも知れませんが、高いレベルの外国語教育を実行するためのビジョンやリーダーシップ支援を提供できる団体になってほしいと思います。そして日本の外国語教育の質を上げ、外国語教育の重要性をアドボケートすることによって、21 世紀に生き残れる日本人を作っていく、日本の社会をもっと明るいものにする。JACTFL が伸びれば、「外国語なんてきらい」なんていう日本人が減って、外国語ができて最高！という日本人が増えて、日本の社会が良くなる、そういうふうになっていただきたい。と思います。今日はどうもありがとうございました。

(カリフォルニア大学サンディエゴ校)

World Language Education in the 21st Century

Yasuhiko TOHSAKU

There are many benefits of world language learning. Many research results demonstrate that by studying world languages we develop critical thinking skills and global fluency, as well as become more creative, open-minded, and capable of working with diverse people. Also, the learner-centered approach to teaching world languages helps students develop better native language abilities and mathematical skills. We, language teachers in Japan, should advocate the learning of diverse world languages in school settings, so that we can create young Japanese people with a global mind and fluency.